

読賣新聞

地球を 読む

いつの時代にも、どの国でも、ささいな事柄を大きく見せかけ、大失敗でも意味ありげに解説する術を心得た政治家がいるものだ。それにしても、2月下旬にハノイで開かれた米朝首脳会談の結果を「成功」と言い張るトランプ米大統領と金正恩朝鮮労働党委員長の言い分には驚く。

金氏が軍部の核施設を廃



山内 昌之
武蔵野大学特任教授

米朝首脳会談

棄する見返りに経済制裁の全面解除を望んだのに対し、トランプ氏は軍部だけなく、新発見の核関連施設などの査察と解体を要求したとされる。日米メディアの中には、実務者レベルの中からは、実務者レベルの詰めが甘く、事前の準備不足が稚拙なトランプ外交の「失敗」の原因だったと見る見方もある。

基本合意に達せず、交渉を早く切り上げた事実から見れば、「失敗」には違いない。しかし、今回のトランプ外交を稚拙と断定できるのだろうか。

外交交渉で、いくら側近が周辺部を詰めても核心部の合意が生まれず失敗するのは、首脳の個性や体制の特性に関わる点なのだ。

核施設の解体といった国家の最高利益に関する交渉は、実務者間では詰め切れず、首脳の判断に委ねられる。分が分つても残る。トランプ氏を米朝首脳会談に駆り立てた大きな動機は、朝鮮戦争の終結宣言に

オバマ前大統領は、「核なき世界」を謳い上げた。2009年のプラハ演説でノーベル賞を得ている。トランプ氏は、北朝鮮との戦争終結をシヨウとして華々しく宣言し、オバマ氏の口舌に勝る実質的成果をゲームで獲得したと、自負したかったはずだ。

ハノイ会談からノーベル賞受賞に至るシヨウが成功するならば、20年秋の大統領再選という最も重要なゲームを有利に運べることになる。<つ面に續く>

シヨウとゲーム 思惑交錯

双方ともに単純な「失敗」だとはいえない。北朝鮮がシヨウとして売り込んだ軍部の核施設の廃棄という最小の妥協と引き換えに、トランプ氏が経済制裁の大規模解除に踏み切った。トランプ氏の理不尽な要求を退けた強い指導者のイメージを示したと説明できる。金氏としても、米大統領に屈しなかった「最高尊厳」として軍と党の力が認められた。だが同時に、統一半島国家を視野に入れた南北融和路線と向き合う近未来戦略を真剣に構想すべきだろう。

トランプ氏が金氏に対して、日本人拉致問題の解決を2度も提起したのは成果である。安倍首相が自任するようになり、問題解決に首相が正面から向かい合う局面が生まれた。それは拉致家族と国民の真摯な抱った政権の真剣勝負となる。

地球を 読む

1面の続き



ハノイ会談には米国内政治の要因も絡んでいた。昨年秋の中間選挙で下院の過半数を得た民主進歩党、メキシコ国境の壁建設予算を認めようとしな。ロシア疑惑の追及も強まる中、トランプ大統領としては、人々の目を逸らすためのシヨウを開いたと言えざるを得ない。

しかし、逆に民主進歩もトランプ氏がハノイにいる間に、コーエン元閣内閣副官士を下院公聴会で喚問し、大統領の醜聞をあばき立てる派手なシヨウを繰り広げ、トランプ氏のお家芸に屈しなかったのである。

他方、金正恩朝鮮労働党委員長からすれば、もし益

決裂でも失敗とは言えず

ければ果たせぬ最後の隙を免れない。金氏は、長期制裁で袋小路に陥った北朝鮮経済を立て直し、エリート集団を潤すに必要ない外貨を得るために、トランプ氏に制裁の全面解除と韓国の支援を確約させたかった。この点はシヨウではなく、金氏が多

大なる名譽を独占できるゲームの勝利につながる。しかし、会談の結果は、

よりほかに正しい決断だったというわけだ。

ハノイ会談の客観的成果は、金氏に核兵器の全廃を2度も提起したのは成果である。安倍首相が自任するようになり、問題解決に首相が正面から向かい合う局面が生まれた。それは拉致家族と国民の真摯な抱った政権の真剣勝負となる。

英文はあすのジャパン・ニュースに掲載する予定です